

# 『日本医学図書館協会六十年略史』

堀江 幸司

東京女子医科大学図書館

## はじめに

「日本医学図書館協会」は昭和2年(1927)11月10日、「官立医科大学附属図書館協議会」として出発する。創立に加わったのは、当時、官立医科大学であった新潟医科大学、岡山医科大学、千葉医科大学、金沢医科大学、および長崎医科大学の5つの附属図書館であった。その後、「官立医科大学附属図書館協議会」は「医科大学附属図書館協議会」(昭和4年<1929>)、「日本医学図書館協議会」(昭和24年<1949>)と名称を変え、現在の「日本医学図書館協会」となったのは昭和29年(1954)のことである。

「官立医科大学附属図書館協議会」の創立の目的は、医科大学の附属図書館における事務全般について打ち合わせることにあった。第1回協議会となった「事務打合会」では、官立医科大学における図書貸借の方策が講じられ、具体的な方法として図書ならびに雑誌の目録を各館が作成して、それを交換する方法等が議論された。この議論が、今日の相互貸借制度の基盤となり、のちの共同目録作成へと発展することになる。第1回協議会に新潟医大から参加し、戦前の協議会を実務的に支えた渡邊正亥(わたなべ・まさい)は創立期の協議会の活動を以下のようにまとめている。\*

- (1) 共同雑誌目録の作成
- (2) 外国雑誌共同購入
- (3) ドイツ雑誌値下げ購入
- (4) 医学図書館分類表の作成

戦前から国際的視野に立って医学図書館活動をすすめた中心人物は、東北帝国大学附属図書館医科分館の吉岡孝治郎であった。ドイツ医学雑誌の値下げ購入は吉岡の功績によるところが大きい。パリで開催された値下げ問題の国際会議には、吉岡のかわりにフランス大使館の佐藤醇造が出席した。

< 著者稿 >

このような国際的な活動は戦後、草間良男(初代会長、慶應・館長)、緒方富雄(2代会長、東大・館長)に受け継がれることになる。Army Medical Library との協力、米国医学雑誌の寄贈受入、国際医学図書館会議への参加など草間、緒方両会長の尽力によるところが大きい。昭和60年(1985)に至って第5回国際医学図書館会議が山本俊一(9代会長、東大・館長)、嶋井和世(10代会長、慶應・館長)、西川 八(11代会長、日大・館長)の指導によって日本大学会館で開催された。創立から60年を経て「日本医学図書館協会」は、国際会議を主催するまでに発展したといえよう。

本章では、本協会の歩みを協議会(総会)の協議題と照合事項をみることによって跡づけた。文相的な記述は、今まで明らかにされていなかった本協会の創立過程を記述するにとどめた。協議題にそえた総会記念写真のうち、終戦前のもは渡邊正亥氏(昭和63年<1988>11月1日没)によって提供されたものである。また戦後20年代前半の写真は、吉岡孝治郎氏が昭和58年(1983)に亡くなられたのを機会に、ご家族が東北大学附属図書館医学分館に寄贈されたものである。写真の提供には多くの方々のご協力を得たが、とくに渡邊正亥氏および東北大学附属図書館医学分館に保管されていたものを発掘してくださった米澤彰氏、20年代後半から50年代までの写真をかしてくださった梅枝軍二氏(名誉顧問)の名を挙げて感謝したい。

---

\* 渡邊正亥 医科時代の思い出. 医学図書館 1957;4(5):255-7.



新潟医科大学本館

## 「官立医科大学附属図書館協議会」の創立過程

大正15年(1926)10月22日、金沢医科大学で開催されていた第7回官立医科大学事務協議会に、清川陸男(きよかわ・むつお)(新潟医科大学書記)、松田金十郎(岡山医科大学嘱託)、三宅次吉(金沢医科大学書記)の3名が出席していた。

彼らは図書館を代表して出席していたので、図書館が抱えている問題を話し合う場として、この協議会を考えていた。清川も議題として「図書館員の手当支給の問題」を提出していた。しかし、いつものことながら今回の会合でも、一般会計および庶務関係の議題が優先され、彼らの提出した議題は後回しとなり、隔靴搔痒の思いであった。

この第7回官立医科大学事務協議会の前に、清川のもとに岡山の松田から「図書館事務打合会」創立の斡旋を依頼する手紙が届く。清川も以前から「図書館事務打合会」の必要を感じ、東北帝国大学附属図書館医科分館の吉岡孝治郎、長崎医科大学附属図書館の山口林一らと相談していた。そこで松田からの手紙がきっかけとなって、具体的に行動を起こすことになった。

清川は第7回官立医科大学事務協議会の開催をとらえて、「図書館事務打合会」の創立を話し合うことにする。大正15年(1926)10月6日北村清宛に金沢医科大学での会合に出席を求める手紙を出した。清川は千葉医科大学附属図書館の北村清とは、部下の渡邊正亥を出張させるなどの交流をもっていた。当時の金沢医科大学附属図書館の館長は古畑種基(法医学)であったが、今回の第7回官立医科大学事務協議会に出席した清川、松田、三宅の3名は古畑館長と会い、彼らの気持ちを伝える。古畑館長は図書館の実務者が話し合いの機会を持つことに理解を示した。この古畑館長との会談のあと、清川がその実現にむけて活躍することになる。清川は、翌昭和2年(1927)7月23日私信の形で、官立医科大学附属図書館の実務者に、「官立医科大学附属図書館事務打合会」創立のための通知を出す。その内容は、以下のようなものであった。(原文はタテ打ち。カタカナのところはひらがなとした。旧字体は新字体とした)



清川陸男(新潟医科大学附属図書館書記)



宮路重嗣(新潟医科大学附属図書館長)

< 著者稿 >

昭和二年七月廿三日  
北村 清様

新潟医科大学附属図書館  
清川 陸 男

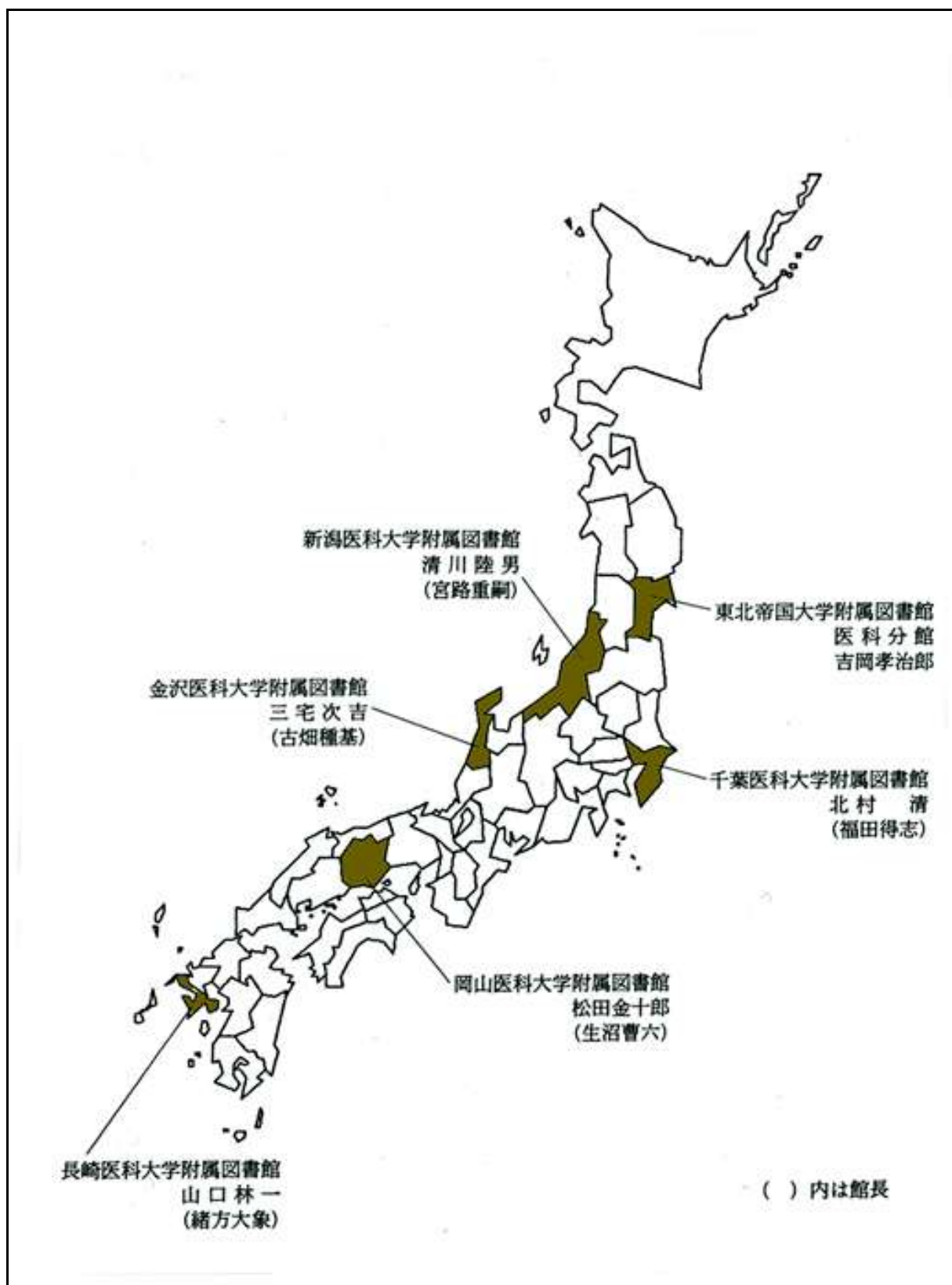
前略 左記事項私信を以て得貴意候條何卒御意見御回報相煩度候

- 一. 昨年金沢医科大学に於て開催せられ候官立医科大学事務打合会の際私的会合に於て官立医科大学附属図書館事務打合会と申す様の会合を一度何処にてか開催致してはとの議二三官立医大図書館員の間談合有之しも最初何処にて主催可致哉の点に就て今日迄決定を見ず行悩みと相成居候も若し五官立大学各図書館長に於て右計画に御賛成御承認を得ば此際是非開催実行候ては如何
- 一. 最初の会合に候へば一回丈は主催者を設けず東京の何処にてか開催候ては如何
- 一. 最初の会合に於て明年以降の事務打合せ決定の事
- 一. 最初の会合は五官立医大附属図書館丈の事務打合会とし吾々事務に従事する者丈の会合と致しては如何
- 一. 最初の会合には出来得へくば五官立医大附属図書館書記又は司書の方にて各一名宛の集りとし最初の事なれば議題等は各自其会合席上に持ち合せては如何
- 一. 本学館長は勿論右趣旨には賛成し居られ候間為念申添置候

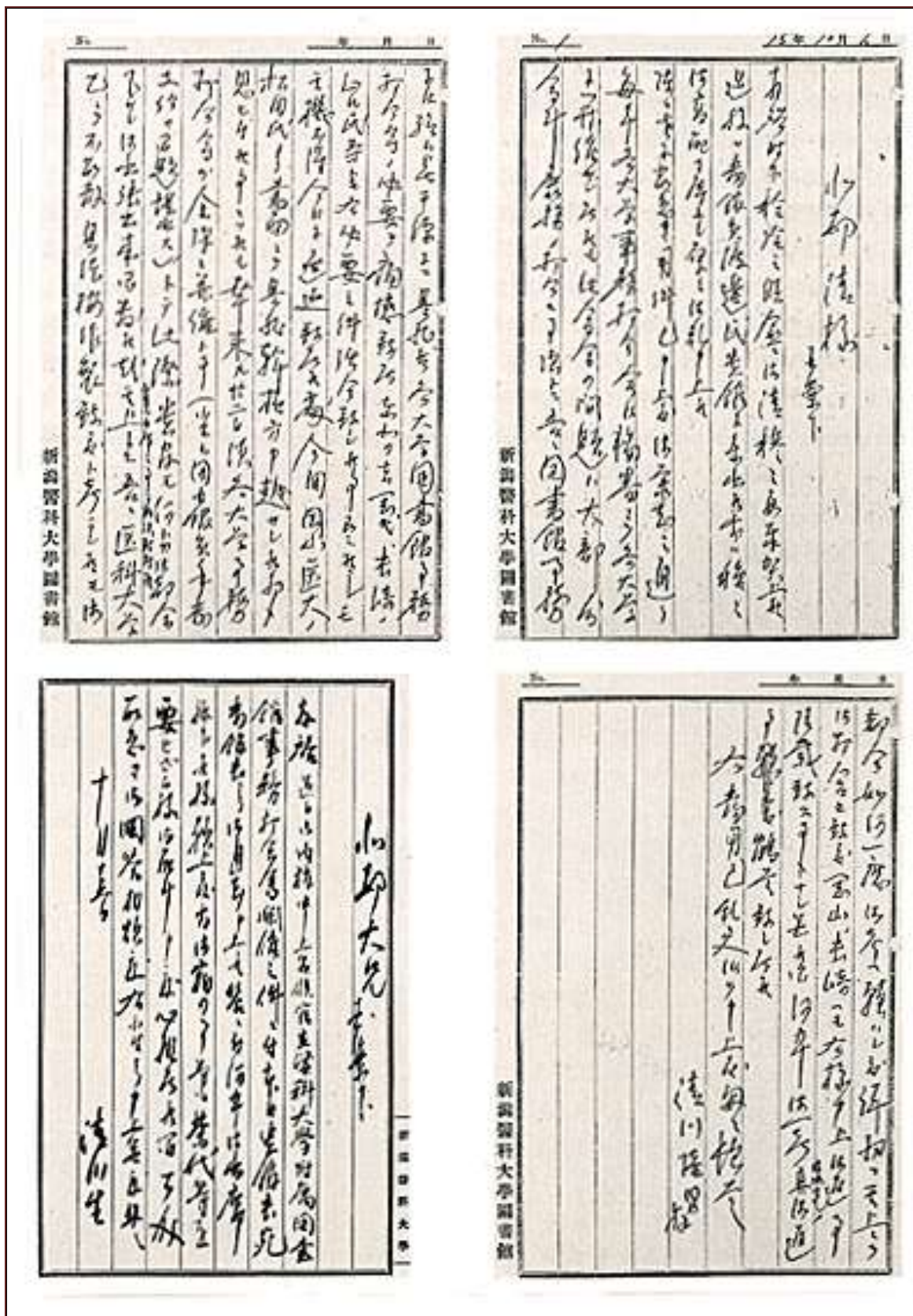
詳細は会合実現の上ならでは協議不可能に付差当り小生一己の考として右事項に付き御照会申上候間何卒貴館長と御相談の上 御回答相煩度候

拝 具

昭和2年(1927)7月23日私信(清川)



「官立医科大学附属図書館協議会」の創立に関係した人々



清川陸男の北村清宛書簡

< 著者稿 >

当時の官立医科大学は新潟医科大学、岡山医科大学、千葉医科大学、金沢医科大学、長崎医科大学の5大学であった。清川の私信は、これら5大学の書記(司書)に出された。千葉医科大学の北村清宛のものが、千葉大学附属図書館亥鼻分館に現存している。

清川は、もう一人この通知を出したい相手があった。東北帝国大学附属図書館医科分館の吉岡孝治郎に対してである。東北帝国大学附属図書館医科分館は、日本最初の本格的な医学図書館として、大正5年(1916)5月から青木薫教授が医科分館の主任となり、新しい医学図書館づくりが始まっていた。吉岡は大正5年(1916)6月14日に附属図書館から分館に配属となり、青木分館長の下で医学図書館員としての修業が始まることになる。吉岡は海外の文献から熱心に欧米の医学図書館のあり方を学んだ。清川は吉岡から東北大学を見学した際に、「欧米には既に Medical Library Association という組織がある」ことを聞かされていた。

このような吉岡との交流から、清川は「官立医科大学附属図書館協議会」の発足となる「附属図書館事務打合せ」に、官立医科大学ではないが、東北帝国大学の吉岡にも是非、参加してもらえたらと考えていたのである。しかし第1回の会合へは吉岡の参加は実現しない。

当時の官立医科大学の館長は、新潟医科大学・宮路重嗣(衛生学)、岡山医科大学・生沼曹六(生理学)、千葉医科大学・福田徳志(薬理学)、金沢医科大学・古畑種基(法医学)、長崎医科大学・緒方大像(生理学)の諸教授であった。各館長とも彼らの熱意を認め、「官立医科大学附属図書館事務打合せ」の結成に同意することになる。

第1回の会合は当初東京で開催することが予定されたが、結局清川の地元である新潟医科大学で開催されることになった。昭和2年(1927)9月20日付の清川の手紙には次のように書かれている。

官立医大附属図書館事務打合せの件、各位のご意見に従い第一回参会は本学に於て来月十月下旬若くは十一月初旬開催・・・期日決定次第正式に御通知可申上候・・・

その後、昭和2年(1927)10月14日に新潟医科大学附属図書館長の宮路重嗣から各官立医科大学の附属図書館長宛に官立医科大学附属図書館事務打合せの開催通知(図第454号)が発信される。

< 著者稿 >

図第四五四号

昭和二年十月十四日

新潟医科大学附属図書館長 宮路重嗣

千葉医科大学附属図書館長 福田得志殿

曩に貴館北村司書殿を通し御内意を得置候官立医科大学附属図書館事務打合会之儀御賛成を得且つ多数の御希望も有之本学に於て来る十一月十、十一日(木、金曜日)午前拾時より開催致度候間貴館書記又は司書御一名出席致さる様御取計相願度御通知旁得貴意候也

追而 今回は最初の会合に候へ共打合事項等来る十月末日迄に当館宛御申越被下度尚御出席者名をも併て御通報被成下度候

以 上

この公文書を追っかけるように、翌10月15日付で清川は各図書館の書記(司書)に出席を求める私信を出している。このあたりに、清川の「官立医科大学附属図書館事務打合会」にかける意気込みが感じられる。

かくして、昭和2年(1927)11月10日(木)、11日(金)の両日に亘って新潟医科大学会議室において、10日午前10時、沢田敬義大学長、宮路重嗣図書館長の出席を得、清川陸男が議長に推薦されて議事が進行された。これが現在の日本医学図書館協会の総会のはじまりとなる。

開催に先立って宮路館長は、次のように挨拶した。

「官立医科大学附属図書館事務打合会」が開催されますにあたり、本会の成立に関して申し述べ挨拶に代えます。

昨年十月金沢医科大学において、第七回官立大学事務協議会が開かれました時、岡山医科大学から御出張の松田書記殿と金沢医科大学の三宅書記殿および当大学から出張の清川書記との間にいずれも各医科大学附属図書館に勤務しておられる関係上、その私的会合の際に各官立医科大学附属図書館においても打ち合せ会の様なものが出来れば図書館事務の進捗上自他多大の利を受けられるから是非その機運を到達させたいというようなお話でありまして金沢医科大学附属図書館長古畑教授に一同御面談になり、同館長もおおいに賛成されましたそうです。私は昨年欧米出張中で、十一月末に帰学致しましてから、本学長から漸く官立医科大学



< 著者稿 >

に新たに附属図書館の設置される様に大学の規定が改正されました事を承り、また清川君からも上記のお話を承りまして、各医科大学附属図書館が相提携して行うことにおおいに賛成致しました。而して金沢におけるお話は千葉および長崎医科大学附属図書館の方へもお廻りを致して各館長の御賛成を得た上で、一度何処かで会合を致し、具体的に話を進めては如何であろうと考えまして、さる七月に清川書記の私信として、各位より貴学附属図書館長にお伺いを願いましたところ、各館長もいずれも御賛成になりました。この際最初のことでありますから新潟が主催となることは、甚だ僭越と存じましてその斡旋にあたり犬馬の労を致しますが、東京で開催致しては如何であろうと申し上げましたところ、二、三の大学から新潟で皮切りをやれというご依頼がありましたから、なお僭越とも考えましたが、去る十月十四日に公文書を以て貴学附属図書館長に、当方で図書館事務打合会を致しますから図書館事務の実務に従事せらるる方のご出席をお願い致しましたところ、いずれもご快諾を得てここに各位のご参集を請い得た次第であります。

而して斯る会合が公式に一度出来れば他日その必要に応じて容易に開催も出来る様になり図書館事務の進捗上、多大の利を得る事と確信致します。どうか本会は将来とも社交的なものではなく名実相伴う会議たらしめんことをねがう次第であります。

終わりに貴学附属図書館長に敬意を表しますとともに、この遠隔の地に多端の公務を割てご出張下されました各位に厚く感謝いたします。

以上



新潟医科大学附属図書館

< 著者稿 >

第1の議題として新潟から「本会々名並に会則制定の件」が提出され、5条からなる会則が草案として提案された。異義なく承認され、ここに「官立医科大学附属図書館協議会」の運営の基礎が確立される。現在の「日本医学図書館協会」の活動の出発点である。

#### 會 則

第一條 本會は各官立医科大学附属図書館長及図書館職員を以て組織し相互の連絡を図ると共に図書館事務の進歩改善に資するを以て目的とす

第二條 本會は官立医科大学附属図書館協議會と称す

第三條 本會は必要に応じて開催し各官立医科大学附属図書館輪番に之を斡旋す

第四條 本會事務所は其都度之を斡旋す

第五條 本會の票決権は一図書館一票とす

全26題の議題を協議して、第1回の「官立医科大学附属図書館協議会」となる「官立医科大学附属図書館事務打合せ」は、11日の正午過ぎに無事終了した。

ところで、「官立医科大学附属図書館協議会」の産婆役となった清川陸男は山形県の出身で、幕末の志士清河八郎(1830-1863)の流れを汲む「維新の志士の風格をもった人物」であったという。

協議終了後、宮路重嗣館長の招宴が当時裏日本随一といわれたイタリア軒で催された。その後実務者ばかりの二次会が清川陸男を中心に料亭金子楼で行われる。文芸春秋の菊池寛などが遊びにきていた場所である。古き良き時代の懇親会であった。この時の懇親会の写真には協議会を産み落とした清川の自信に満ちた顔と、その後協議会活動を実務で支える渡邊正玄(新潟)、北村清(千葉)、山本弥三吉(金沢)らの顔が若々しく、生き生きと写っている。床の間正面には協議会誕生のきっかけをつくった松田金十郎(岡山)が座り、新潟美人をひとり挟んで、その右手に山口林一(長崎)が座る。実務を重んじながら、図書館長および図書館職員間の相互の係を保っていく現在の日本医学図書館協会の出発にふさわしい写真である。



料亭金子楼での実務者ばかりでの宴会

< 著者稿 >

## 協議会記念写真(第1回 – 第15回)

[[PDF](#) ファイルを参照]

(個人リポジトリ登録にあたり、著者が渡邊正亥先生より借用したオリジナルから複製し、保管しているフィルムから PDF ファイルを作成しました。また、見開き表示すると右ページに人型がくるようにファイル構成し、左ページの写真と比較して、写っている方の名前がわかるようにしました。今回、あらためて調査し、判明した人物名も記載してあります。)

(平成21年11月25日 個人リポジトリ登録)